美・外見への注目と自己像
――日本人若年女性の傾向分析――

Effects of Attention about Aestheticity or Appearances on Self-image
――A Research and an Analysis for Japanese Young Women――

山田　雅子
YAMADA Masako

要旨：関東在住の日本人女子学生87名を対象とし、「表情が豊か」「身だしなみがきちんとしている」など、女性の美しさに関わる32項目に対する自己像への適合度について調査を行った。因子分析の結果、＜道徳性＞＜快活さ＞＜清潔感＞＜行動力＞＜歩き方・姿勢＞＜美意識＞＜肌のハリ・キメ＞＜プロポーション＞の８因子が導出され、「美しい」「素敵な」「魅力的」といった評価的表現を伴う女性像（山田, 2019a）とは異なる因子構造を持つことが明らかとなった。また、美と健康に対する関心や外見と内面に対する意識についても別に尋ね、当該結果に基づく群を要因として各因子得点を分散分析したところ、美に対する関心や外見に対する意識が＜清潔感＞に対する自己評価を下げる方向に働く傾向が捉えられた。

キーワード：自己，自己評価，美，外見，因子

１．はじめに

日本人の若者は自己肯定感が低いと指摘されて久しい。内閣府による「令和元年版 子供・若者白書」においても、「自分自身に満足している」との回答が「そう思う」と「どちらかといえばそう思う」を合わせて45.1％、残る54.9％は「どちらかといえばそう思わない」「そう思わない」を選択した旨が示されている（内閣府, 2019）。当該報告は満13歳から満29歳までの日本人男女1134名を対象に実施された調査結果に基づく。先の「45.1％」という数値だけを取り出すな

らば、プラスの評価もマイナスの評価もなく、半数以下の対象者が自分に満足していると答えたということを捉えるのみである。だが、諸外国（韓国、アメリカ、イギリス、ドイツ、フランス、スウェーデン）における同項目の結果がいずれも70％を超えていることを知ると、俄に数値の見え方が変化する。自分に満足していないことが即座に問題であるとは言い得ないが、日本人の若者は極端に否定的な方向に偏っていることには間違いがないようである。

では、こうした自分に対する包括的な満足感ではなく、より具体的な自己像においても、やはり控え目な評価がなされるのであろうか。また、外見や内面、更に詳細な要素など、評価する側面によっても評価の高低に偏りが生じるのであろうか。

本研究では、美しさに関わる側面から自己像や自己評価の実態を捉えることを第一の目的として日本人若年女性たちに対する調査を行った。また、自己評価を左右する要素として、美や外見に対する注目にも焦点を当てた。なぜなら、20代から60代の日本人女性を対象とした調査の結果、美的価値観において外見的要素、すなわち美貌を重視するタイプの回答者は、相対的に自己評価が低いことが指摘されたからである（山田，2019a）。換言すれば、価値観の在り方によって自己評価そのものが変化する可能性が示唆されたことになる。この点について詳細に検討することを第二の目的とし、因子分析や相関分析等の手法を用いて特徴抽出と連関の導出を図った。

２．方法[i]

２．１　対象者

関東在住の日本人女子学生87名（平均年齢19.04歳）

２．２　調査時期

2018年９月

２．３　調査内容[ii]

各対象者に調査用紙を配付し、回答者自身および回答者が抱く各女性像（美しい／素敵な／魅力的）について、先行研究（山田，2007，2015，2019b）に基づく32項目の要素がどの程度当てはまるか選択させた（「全く当てはまらない」「ほとんど当てはまらない」「あまり当てはまらない」「やや当てはまる」「かなり当てはまる」「非常に当てはまる」の６段階より選択）。具体的な

項目については、Figure 1を参照されたい。また、各表現を用いたくなる女性が身近にいるか否かについても回答を求めた（「いる」「いない」より選択）。

更に、美と健康のどちらに関心があるか、自身の外見と内面のどちらを意識しているかを５段階から選択させ、自身の美しさに対する自信の度合いを６段階（全く自信がない～非常に自信がある）から選ぶよう回答を求めた。

３．結果および考察

３．１　32項目に対する適合度評価

３．１．１　基礎統計量

回答者自身および各女性像に対する32項目の適合度の回答に対し、「全く当てはまらない」を１、「ほとんど当てはまらない」を２、「あまり当てはまらない」を３、「やや当てはまる」を４、「かなり当てはまる」を５、「非常に当てはまる」を６として数値化した。Figure 1は当該数値化によって得られた回答者自身および各女性像のプロフィールである（山田，2019d）。

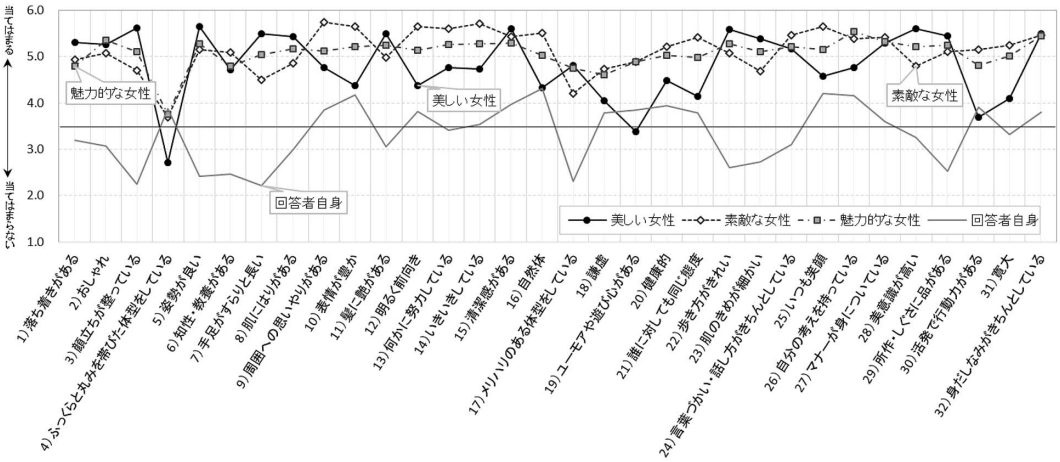

Figure 1　回答者自身および各女性像のプロフィール　※再掲

回答者および３種の表現に基づく女性像の評価値を対象に一次元配置分散分析（４水準）を行った結果、32項目全てについて主効果が有意であり、多重比較検定の結果、回答者自身と他の女性像との間では、次のTable 1-1およびTable 1-2のような差異の有意性（0.1％水準）が確認された。

Table 1-1　回答者自身と各女性像 多重比較検定結果（1）

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16
美しい女性	***	***	***	***	***	***	***	***	***	n.s.	***	*	***	***	***	n.s.
素敵な女性	***	***	***	n.s.	***	***	***	***	***	***	***	***	***	***	***	***
魅力的な女性	***	***	***	n.s.	***	***	***	***	***	***	***	***	***	***	***	***

※***p<.001, *p<.05

Table 1-2　回答者自身と各女性像 多重比較検定結果（2）

	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32
美しい女性	***	***	n.s.	*	n.s.	***	***	***	n.s.	**	***	*	***	n.s.	***	n.s.
素敵な女性	***	***	***	***	***	***	***	***	***	***	***	***	***	***	***	***
魅力的な女性	***	***	***	***	***	***	***	***	***	***	***	***	***	***	***	***

※***p<.001, **p<.01, *p<.05

有意差が見られなかった項目は非常に限られており、「美しい女性」との間では「10）表情が豊か」「16）自然体」「19）ユーモアや遊び心がある」「21）誰に対しても同じ態度」「25）いつも笑顔」「30）活発で行動力がある」「32）身だしなみがきちんとしている」の７項目、「素敵な女性」および「魅力的な女性」との間では「４）ふっくらと丸みを帯びた体型をしている」の１項目のみであった。回答者自身と評価的な表現によって抱かれる女性像との間には確固とした差異、心理的距離が認識されていると考えられる。

本調査では、「全く当てはまらない」から「非常に当てはまる」まで６件法で回答を求め、それぞれの段階に１～６の数値を充てた。このため、全体の平均が3.5を越える場合には、全体として「当てはまる」の方向に偏って回答した対象者が多かったことになる。平均値が3.5を越える項目はTable 2の通りである。

Table 2　自己評価の高い項目（3.5を越える項目）

順　位	項　　目	平均値
1	16）自然体	4.318
2	25）いつも笑顔	4.212
3	10）表情が豊か	4.176
4	26）自分の考えを持っている	4.155
5	15）清潔感がある	3.976
6	20）健康的	3.941
7	30）活発で行動力がある	3.905
8	4）ふっくらと丸みを帯びた体型をしている	3.882
9	9）周囲への思いやりがある	3.847
10	19）ユーモアや遊び心がある	3.847
11	12）明るく前向き	3.824
12	32）身だしなみがきちんとしている	3.798
13	18）謙虚	3.788
13	21）誰に対しても同じ態度	3.788
15	27）マナーが身についている	3.595
16	14）いきいきしている	3.541

また、32項目の総合点は「回答者自身」が107.15（SD：18.29）、「美しい女性」が154.45（SD：16.88）、「素敵な女性」が163.86（SD：14.88）、「魅力的な女性」が162.16（SD：17.61）であった。一次元配置分散分析（４水準）では、有意な主効果が確認され（0.1％水準）、多重比較検定の結果、回答者自身と３種の女性像との間で有意な差異が見られた（いずれも0.1％水準）。全体として、「美しい」「素敵な」「魅力的な」といった評価的な表現によって抱かれる女性像の方が32項目への適合度が高く、それに比して回答者自身にはやや当てはまりにくいと言える。

32項目の半数にあたる16項目が3.5を超えたことになるが、全体として、行動的、性格的要素が多いことに気付く。「25）いつも笑顔」「10）表情が豊か」は視覚的に確認される外見的要素としても解釈できるが、美しさにおいて外見に注目する群は「笑顔」という要素を内面の美しさに含め、内面に注目する群は「表情」を外見の美しさに含める傾向を持つことが示されている（山田，2014）。このため、笑顔や表情を単なる視覚的要素と捉えず、内面を示す性格的特性として解釈することも必要と考えられる。

３．１．２　因子構造

前述の方法により数値化した各評定に対し、因子分析（主因子法斜交プロマックス回転）を行った。なお、本分析では回答者自身に対する評価の因子構造を捉えるため、回答者自身に対するデータのみを対象とした。Table 3は当該方法によって得られた因子パターンであり（累積寄

与率58.37%)、Table 4は各因子の主な構成要素である。

抽出された８つの因子には、それぞれ＜道徳性＞＜快活さ＞＜清潔感＞＜行動力＞＜歩き方・姿勢＞＜美意識＞＜肌＞＜プロポーション＞と名付けた。20代から60代の女性544名を対象とし、本調査と同様の項目を用いた山田（2019a）では、＜活発さ＞＜立ち姿＞＜肌＞＜謙虚さ＞＜マナー＞＜美意識＞＜清潔感＞＜落ち着き＞の８因子が報告され、本結果においても当該研究報告と類似する点が多分に見られたと言える。

Table 3　回答者自身の評価に基づく因子パターン（主因子法斜交プロマックス回転）

	因子1 道徳性	因2 快活さ	因子3 清潔感	因子4 行動力	因子5 歩き方・姿勢	因子6 美意識	因子7 肌のハリ・ツヤ	因子8 プロポーション	共通性
21）誰に対しても同じ態度	0.612	0.230	-0.214	-0.008	0.047	-0.086	0.035	0.072	0.417
18）謙虚	0.612	-0.040	0.271	-0.151	0.041	-0.055	-0.082	-0.216	0.497
24）言葉づかい・話し方がきちんとしている	0.598	0.191	-0.203	-0.075	0.217	0.075	0.147	0.016	0.592
31）寛大	0.560	0.100	0.090	0.182	-0.141	-0.123	0.114	0.057	0.450
29）所作・しぐさに品がある	0.526	-0.065	-0.039	0.243	0.234	0.245	-0.112	0.081	0.699
27）マナーが身についている	0.515	0.109	0.046	0.297	-0.011	0.085	0.068	0.044	0.558
9）周囲への思いやりがある	0.465	0.461	0.039	0.049	0.016	0.041	-0.016	0.088	0.562
10）表情が豊か	0.011	0.875	-0.012	0.013	0.019	0.036	-0.018	-0.048	0.753
25）いつも笑顔	0.195	0.638	0.046	0.179	0.046	-0.193	0.042	-0.072	0.619
16）自然体	0.304	0.619	0.165	-0.081	-0.122	0.036	0.060	-0.055	0.610
19）ユーモアや遊び心がある	0.018	0.572	-0.065	0.186	0.106	0.179	-0.170	0.026	0.415
15）清潔感がある	0.037	0.261	0.699	-0.191	0.106	0.128	-0.133	0.056	0.705
14）いきいきしている	-0.225	0.070	0.659	0.429	0.165	-0.004	0.133	-0.137	0.839
32）身だしなみがきちんとしている	0.231	-0.111	0.625	-0.166	-0.222	0.406	0.067	0.031	0.702
20）健康的	-0.056	-0.052	0.541	0.085	-0.057	-0.074	0.003	-0.147	0.286
13）何かに努力している	0.134	-0.149	0.538	0.431	0.098	-0.074	-0.085	0.188	0.663
30）活発で行動力がある	-0.086	0.212	-0.043	0.728	-0.113	0.285	-0.007	-0.057	0.631
26）自分の考えを持っている	0.168	0.079	-0.024	0.575	-0.059	0.086	0.107	-0.034	0.453
12）明るく前向き	-0.065	0.271	0.384	0.412	-0.045	-0.060	0.031	0.149	0.626
22）歩き方がきれい	0.149	-0.066	-0.023	0.016	0.709	0.193	-0.011	-0.060	0.698
5）姿勢が良い	0.019	0.140	0.007	-0.082	0.658	-0.018	0.017	-0.004	0.439
1）落ち着きがある	0.328	-0.315	0.178	-0.169	0.391	0.030	0.002	-0.104	0.450
11）髪に艶がある	-0.085	0.233	0.372	-0.080	0.379	-0.140	0.127	0.086	0.494
28）美意識が高い	0.129	0.009	-0.069	0.281	0.003	0.756	-0.051	-0.106	0.650
2）おしゃれ	-0.195	0.099	0.070	0.121	0.208	0.753	0.087	0.041	0.823
8）肌にはりがある	0.017	0.027	0.085	0.129	0.094	0.004	0.859	-0.057	0.802
23）肌のきめが細かい	0.221	-0.180	-0.154	0.033	0.154	0.002	0.762	-0.001	0.742
3）顔立ちが整っている	-0.109	0.178	0.100	-0.155	0.160	0.129	0.338	0.296	0.512
7）手足がすらりと長い	0.033	0.011	-0.085	0.016	-0.072	-0.088	-0.056	1.025	0.899
6）知性・教養がある	0.176	-0.173	-0.019	0.302	0.145	-0.014	-0.005	0.340	0.405
17）メリハリのある体型をしている	0.173	-0.135	0.193	0.142	-0.035	0.126	0.117	0.264	0.332
4）ふっくらと丸みを帯びた体型をしている	0.183	0.219	0.257	0.155	-0.052	-0.211	-0.104	-0.311	0.355
寄与率（%）	25.10	8.85	5.88	5.36	3.36	3.80	3.66	2.34	
累積寄与（%）	25.10	33.95	39.83	45.20	48.56	52.36	56.03	58.37	

Table 4　各因子名と主な構成要素

因子名	構　成　要　素
因子１　道徳性	誰に対しても同じ態度、謙虚、言葉づかい・話し方がきちんとしている、寛大、所作・しぐさに品がある、マナーが身についている、周囲への思いやりがある
因子２　快活さ	表情が豊か、いつも笑顔、自然体、ユーモアや遊び心がある、周囲への思いやりがある
因子３　清潔感	清潔感がある、いきいきしている、身だしなみがきちんとしている、健康的、何かに努力している
因子４　行動力	活発で行動力がある、自分の考えを持っている、何かに努力している、いきいきしている、明るく前向き
因子５　歩き方・姿勢	歩き方がきれい、姿勢が良い
因子６　美意識	美意識が高い、おしゃれ、身だしなみがきちんとしている
因子７　肌のハリ・キメ	肌にはりがある、肌のきめが細かい
因子８　プロポーション	手足がすらりと長い

３．２　回答者自身の関心・意識および美しさに対する自信

３．２．１　各評価の基礎統計量

関心の対象（美か健康か）、意識の対象（外見か内面か）について、５段階（美に関心・美にやや関心・どちらも同程度・健康にやや関心・健康に関心／外見を意識・外見をやや意識・どちらも同程度・内面をやや意識・内面を意識）からの選択結果を集計し、次のTable 5のクロス集計表を得た。

カイ二乗検定によれば度数の偏りは有意であり、特に「美に関心／外見を意識」「やや健康に関心／やや内面を意識」において頻度が高く、「同程度関心／外見を意識」の頻度が低いことが分かった。全体として、本調査の対象者は美に関心を寄せ、外見に意識を向けていたことが指摘できる。

Table 5　美―健康に対する関心と外見―内面に対する意識に対するクロス集計表

	美に関心	美にやや関心	同程度関心	健康にやや関心	健康に関心	合　計
外見を意識	6	3	1	0	0	10
やや外見を意識	1	16	12	3	0	32
同程度意識	3	13	20	1	0	37
やや内面を意識	0	0	4	3	0	7
内面を意識	0	0	1	0	0	1
合　計	10	32	38	7	0	87

関心、意識の回答に対し、それぞれ１～５を充て数値化したところ、関心の平均は2.483（SD：0.805）、意識の平均は2.506（SD：0.847）であった。全体として、関心の対象は健康よりもやや美に偏っており、意識は内面よりも外見に注がれる傾向にあったと言える。山田（2018）におい

ても24歳以下の女性についてはほぼ同様の数値が報告されており、一方、25歳以上の女性では、健康に対する関心が24歳以下の層よりも高まることが指摘されている。女性全般の傾向というよりも、若年の女性の特徴として、健康よりも美、内面よりも外見といった方向性があるものと考えられる。

更に、自身の美しさに対する自信の度合いを６段階（全く自信がない～非常に自信がある）から選ぶよう回答を求めた結果に０～５を充て数値化したところ、1.012（SD：1.063）が平均値として得られた。度数としては、「段階０」が37名と最多、「段階１」が20名、「段階２」が18名、「段階３」が10名、「段階４」「段階５」の選択者は０名であった。全体として、自信の度合いは非常に低く、自信を持っていると表明できる対象者は非常に少数であったと言える。

３．２．２　相互の連関

数値化した関心（美～健康）と意識（外見～内面）の間には、中程度の正の相関が認められ（r=0.439）、意識をy、関心をxとした回帰式としてy=0.417x+1.437が得られた。両者の間には連関があり、健康よりも美に対して関心を持つ場合には、同時に内面よりも外見に関心を持つ傾向にあったことが指摘できる。

また、対象者自身の美しさに対する自信の度合いと前述の関心や意識との間で相関分析を行った結果、いずれの場合も相関はほとんどなく（対関心：r=0.076／対意識：r=0.020）、美に関心が高いと美しさに対する自信が低いなど、関心や意識の対象によって美しさに対する自信の度合いが左右される様子は確認されなかった。

３．３　32項目の自己評価合計と各評価の連関

３．３．１　相関と回帰

32項目の適合度の回答の合計値と関心・意識・美しさへの自信のそれぞれについて、相関を確認した。相関係数rは対関心、対意識、対美しさへの自信の順に、0.110、0.172、0.428であり、32項目の自己評価合計と自身の美しさに対する自信との間にのみ中程度の正の相関が認められた。

当該結果を受け、32項目の合計値をy、美しさへの自信をxとして回帰分析を行ったところ、y=7.519x+99.67が導出された。美しさへの自信に対する回答が１段階異なることにより、自己評価全体の合計値が7.5程度変化することになり、美しさに対する自信を持つことができる対象者は、32項目に亘る多面的な評価に対しても適合度を高く回答したと捉えられる。

３．３．２　分散分析

３．３．１の相関および回帰分析により関心と意識との間に連関が見られたことを踏まえ、美に関心があり（「美に関心」もしくは「美にやや関心」）、かつ、外見に意識を向ける傾向（「外見を意識」もしくは「外見をやや意識」）にある回答者25名とその他の60名とに群分けし、32項目に対する適合度を目的変数として一元配置分散分析（２水準）を行った。なお、回答に欠損のある対象者を除いたため、本分析の対象は合計で85名となった。

結果、群の主効果は有意傾向であり（$F_{(1, 84)}=3.457$, $p<.10$）、美に関心があり、外見を意識する群は、健康に対して美と同程度以上に関心があり、内面を外見と同程度以上に意識する群よりも、32項目に対する適合度が統計的にも低い傾向にあることが判明した。当該結果は、美貌重視型の美的価値観と低い自己評価との連関を指摘した既報（山田，2019a）と通ずる部分があると言える。

この結果を受け、美に対する関心がある群（「美に関心」もしくは「美にやや関心」）44名とその他41名との間で一元配置分散分析（２水準）を行ったところ、群の主効果は有意ではなかった（$F_{(1, 84)}=2.317$, n.s.）。また、外見を意識する群（「外見を意識」もしくは「外見をやや意識」）44名とその他41名との間で一元配置分散分析（２水準）を同様に行った結果、群の主効果は有意ではなかった（$F_{(1, 84)}=2.028$, n.s.）。

続いて、３．３．１の分析により中程度の相関が見られたことを踏まえ、自身の美しさの自信に対する回答を要因（４水準）とし、32項目の合計値に対し一元配置分散分析を行った。結果として、美しさに対する自信の主効果は有意であり（$F_{(3, 83)}=6.351$, $p<.001$）、多重比較検定により、「０段階」と「３段階」との差は1％水準において有意、「０段階」と「２段階」との差は10％水準において有意傾向であると判明した。自身の美しさについて全く自信がないと回答した対象者は、より自信のある対象者に比して全体的に低い評価をしていたことになる。

３．４　因子構造における群間比較

３．４．１　関心・意識の特徴による自己評価の差異

前項までの分析により、32項目に対する適合度と関心・意識が連関を持つことが明らかとなった。美しさに対する自己評価のどのような側面において差異が生じるのかを確認するため、３．１．２において求めた因子構造のスコアを群間比較することにより、関心や意識の特徴による影響を確認した。

３．３．２と同様の方法により、「美・外見群」25名とその他60名に群分けし、因子得点を目的変数として一元配置分散分析を行った。＜清潔感＞において群の主効果が有意（$F_{(1,81)}=8.454$, $p<.01$）であり、＜美意識＞（$F_{(1,81)}=2.792$, $p<.10$）と＜肌のハリ・キメ＞（$F_{(1,81)}=3.248$, $p<.10$）において有意傾向であった。Figure 2は各群の各因子得点に基づくレーダーチャートである。「美・外見群」は＜清潔感＞と＜肌のハリ・キメ＞に対する自己評価が低い一方、＜美意識＞に対してはその他の対象者よりも相対的に高く評価する傾向にあったことが読み取れる。

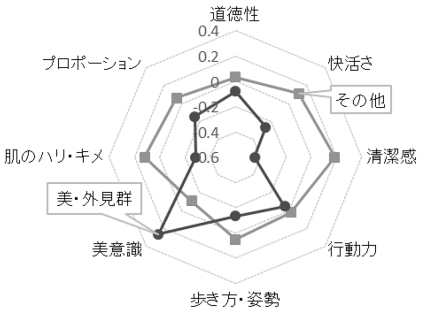

Figure 2　因子得点（美・外見群／その他）

＜肌のハリ・キメ＞の因子は外見的要素であるが、＜清潔感＞の因子を構成する項目は、Table 3に示されるように「15）清潔感がある」「14）いきいきしている」「32）身だしなみがきちんとしている」「20）健康的」「13）何かに努力している」等であり、必ずしも視覚的に確認されるものに限られているとは言えない。これより、美に関心を持ち、自身の外見に意識を向けるということは、自身の外見に対する評価を直接的に下げるということではないことが推測される。また、「28）美意識が高い」「２）おしゃれ」「32）身だしなみがきちんとしている」等によって構成される＜美意識＞の評価は「美・外見群」の方が有意に高いため、部分的にはむしろ自信を持つ傾向のあることが確認されたことになる。これらを包括すると、美や外見に対する意識の高さは、個人的あるいは対自的とも言い得る＜美意識＞への自信を高め、他方、対人的、対他的な配慮が関わる＜清潔感＞ついては、むしろ自信を失わせる可能性があると考えられる。

美に対する関心と外見に対する意識の両特徴を持つ群に前述のような特徴が見られたことを踏まえ、関心と意識それぞれによって改めて群分けし、因子得点に対する一元配置分散分析（２水準）を行った。これにより、関心と意識のそれぞれが因子に対して持つ作用の方向性を取り出すことができると考えられる。

まず、美に対して関心のある（「美に関心」もしくは「美にやや関心」）39名とその他（「どちらも同程度」「健康にやや関心」「健康に関心」）43名との間で比較した結果、＜清潔感＞と（$F_{(1,81)}=3.125$, $p<.10$）、＜美意識＞（$F_{(1,81)}=3.344$, $p<.10$）において群の主効果が有意傾向であった。Figure 3は、当該二群の因子得点を表したグラフである。＜清潔感＞においては美に関心のある群の方が低く、＜美意識＞は当該群の方が高い傾向にあることがグラフから読み取れる。

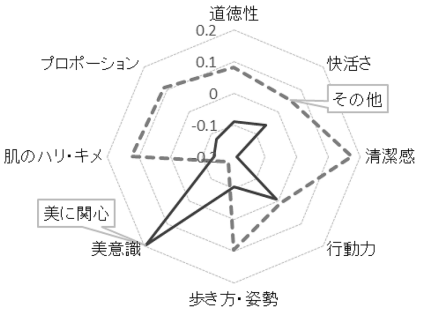

Figure 3　因子得点（美関心群／その他）

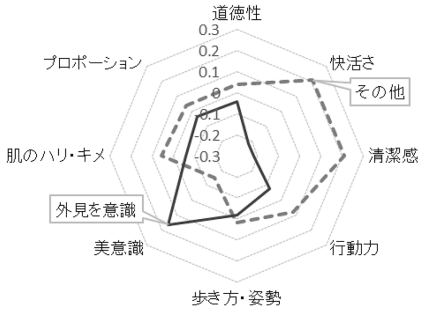

Figure 4　因子得点（外見意識群／その他）

次に、外見を意識する群（「外見を意識」もしくは「外見をやや意識」）40名とその他（「どちらも同程度」「やや内面を意識」「内面を意識」）42名とに分け、群を要因とした一元配置分散分析を行った結果、＜快活さ＞（$F_{(1,81)}=4.294$, $p<.05$）と＜清潔感＞（$F_{(1,81)}=4.376$, $p<.05$）において有意な主効果が確認された。各群の因子得点が表されたFigure 4においては、＜快活さ＞と＜清潔感＞のいずれにおいても外見を意識する群の方が低い得点を示していることが分かる。

Table 6は関心と意識による因子への影響をまとめた表である。３．２．２において、美―健康に対する関心と外見―内面に対する意識の連関が明らかとなったが、共通する部分は、美や外見に対する注目が＜清潔感＞の自己評価を下げる方向に働く点であり、それぞれに異なる作用を持つことも指摘できる。

Table 6　関心・意識が持つ各因子への作用

	1 道徳性	2 快活さ	3 清潔感	4 行動力	5 歩き方・姿勢	6 美意識	7 肌のハリ・キメ	8 プロポーション
美に対する関心			↓			↑		
外見に対する意識		↓	↓					
美に対する関心＋外見に対する意識			↓			↑	↓	

3．4．2　美しさに対する自信による自己評価の差異

因子得点を目的変数とし、美しさに対する自信の度合い（0・1・2・3）による群間比較を一元配置散分析により行った。結果、＜歩き方・姿勢＞（$F_{(3, 80)}=7.369$, $p<.001$）、＜美意識＞（$F_{(3, 80)}=4.600$, $p<.01$）、＜肌のハリ・キメ＞（$F_{(3, 80)}=6.670$, $p<.001$）、＜プロポーション＞（$F_{(3, 80)}=12.513$, $p<.001$）において群の主効果が有意、＜道徳性＞（$F_{(3, 80)}=2.169$, $p<.10$）において有意傾向であることが確認された。

Figure 5は美しさに対する自信の度合いごとの因子得点を示したレーダーチャートである。「段階0」を示す最も濃い色のグラフは、全体に中央に小さくまとまっており、「段階1」を示す▲のマーカーに付いたグラフも比較的小さな図形を示していると言える。多重比較検定の結果、＜歩き方・姿勢＞と＜肌のハリ・キメ＞については、「段階0」と「段階2」「段階3」との間に、＜美意識＞では、「段階0」と「段階2」との間に、＜プロポーション＞では、「段階0」および「段階1」と「段階2」「段階3」との間に有意差が認められた。

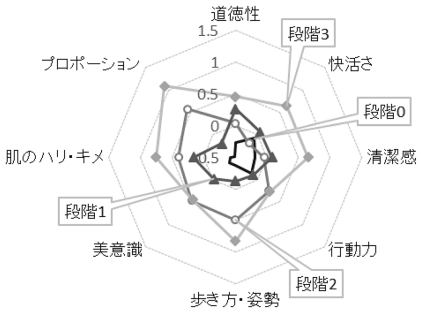

Figure 5　因子得点（美しさに対する自信の度合いによる比較）

＜快活さ＞＜行動力＞＜歩き方・姿勢＞＜肌のハリ・キメ＞＜プロポーション＞の５因子については、「段階0」「段階1」「段階2」「段階3」の順に因子得点が高く、残る＜道徳性＞＜快活さ＞＜清潔感＞＜美意識＞においても、「段階3」が最高得点を示すことは共通しており、自身の美しさに対する自信が各要素の自己評価にも連動する様子が窺われる。

４．総合考察

本研究の第１の目的は、日本人若年女性の自己像、自己評価特性について記述することである。３．１．１の通り、「美しい」「素敵な」「魅力的な」といった女性像と比較した場合には、回答者自身への適合度は明らかに低いことが分かった。だが、美しさの構成要素としてしばしば挙げられる笑顔（山田，2015）に関しては自身の適合度も高く評価されており、全てについて否定的に捉えられているのではないことが指摘できる。

また、行動的、性格的特性については比較的評価が高く、視覚的要素、いわば外見的側面を持つ項目の中では、笑顔や身だしなみなど、心理的な感情の動きや内的な心掛けが深く関わる要素に対して比較的高い自己評価が示される傾向が捉えられた。高い自己評価の見られた項目は、３．１．２の因子構造における＜快活さ＞に深く関わるものであり、本調査の対象者は当該要素に対して相対的に自信を持つ特徴があると言える。

更に、美や外見への注目が自己評価を下げるとの仮説は一部において支持されたと言い得る。３．３．２の分析の通り、美に関心を持ち、かつ外見を意識する群は全体の自己評価が低い傾向にあることが明らかとなり、３．４．１において因子ごとに分析した結果、美に対する関心は＜美意識＞に対する自己評価を上げる一方で、＜清潔感＞に対する評価を下げることが判明した。また、外見に対する意識は、＜快活さ＞や＜清潔感＞に対する評価を下げる方向に働く傾向も認められた。つまり、美や外見に対する注目は自己評価全体を下げるのではなく、限定的に作用すると言える。しかも、外見的要素の自己評価を直接的に下げるのでないことは興味深い点である。

女性は男性に比して全体的自己評価が低く、外見に対しても男性より否定的に捉える傾向にあることが報告されている（山本，2010）。また、外見を重要視することが外見の自己評価にネガティブに影響することも指摘されており、山田（2019a）と同様に、外見重視傾向は否定的な自己評価に繋がるとされる（山本，2010）。本研究においても同種の結果が認められたと言えるが、外見に向ける意識が外見以外の評価を低める方向に働くことは、新規に得られた事象である。

ここで問題となるのは、何故、美や外見に対する注目が＜清潔感＞や＜快活さ＞といった内面に深く関わる因子に対してマイナスに作用するのかということである。可能性の一つとして、美や外見に対する注目による公的自己意識（public self- consciousness）の高まりの影響が考えられる。公的自己意識は、容貌や言動などの外側から捉えられる自己側面に注意を向けやすい傾向とされ、当該意識の高い人物は他者からの評価的反応に敏感との研究結果も示されている（Fenigstein，Scheier，& Buss，1975）。また、対人不安の原因となることも指摘されている（伊藤・丹野，2003）ここで、＜清潔感＞＜快活さ＞を構成する要素を改めて目を向けてみたい。＜清潔感＞を構成するのは、「15）清潔感がある」「14）いきいきしている」「32）身だしなみがきちんとしている」「20）健康的」「13）何かに努力している」といった項目であり、＜快活さ＞の構成要素は、「10）表情が豊か」「25）いつも笑顔」「16）自然体」「19）ユーモアや遊び心がある」「９）周囲への思いやりがある」である。これらの要素は、内面に深く関わると同時に、多分に対人的、対他的な側面を持つ。つまり、美や外見への注目度の高い回答者は他者反応への敏感性が高く、そのために、＜清潔感＞や＜快活さ＞に関わる要素をより厳しく評価したのではないかと考える。

更に、冒頭で言及した内閣府による「子供・若者白書」では、他国と異なる日本人の傾向として、自己有用感と自己満足感との連関（「自分は役に立たないと感じる」と「自分に満足している」との連動）と併せ、「他人に迷惑をかけなければ、何をしようと個人の自由だ」という考え方に同意する度合いの低さについても言及している（内閣府，2019）。当該項目に対する日本人の同意回答率は42.2％に留まり、他の6ヶ国の結果がいずれも80％前後の同意を示す状況とは明らかに質を異にしている。「他人に迷惑をかけなければ」という文言が付いているにも拘わらず、日本人の半数以上が同意していないことになるため、実体としての他者の存在のあるなしに関わらず、日本では社会規範が強く機能していることが捉えられる。美や外見に対する注目が直接的に＜清潔感＞や＜快活さ＞への自己評価を下げるのではなく、こうした社会規範や他者から見られる自分に対する意識が媒介となっていることも更に検討すべきと考える。

また、回答者自身の美しさに対する自信の度合いと32項目の自己評価との間にも連関が見られた（３．３および３．４．２参照）。当該結果は回答傾向に一貫性があることを示すものでもあり、「自分の美しさに対する自信」という単一項目の信頼性はある程度確保できていると考えることができる。

冒頭の目的に掲げた通り、本研究では日本人若年女性たちが抱く自己像の特徴の一端を捉えることができた。本調査とほぼ同質の対象について、自尊感情が非常に低いことが指摘されてもい

るが（山田，2016）、＜快活さ＞等、評価する自己の要素、側面によっては高く評価する部分もあることが明らかとなった。また、美や外見に対する注目や意識が外見的要素として即座に捉えられない要素に影響を及ぼしている可能性が示唆されたことも、日本人女性の自己像の在り方を探る一助となると考える。

5．今後の課題

本研究では、日本人女子学生による自己像と美や外見への注目との関係に迫った。山田（2019d）においても指摘されていることであるが、本調査で用いられた32項目は「美しい」という表現と親和性の高い要素によって構成されたものである。このため、結果の解釈には、美しさに関わる側面に特化して自己像を捉えたということに留意しなければならない。また、本調査結果に対する考察として、公的自己意識の影響について言及した。当該可能性を確かめるため、自己意識の状態を測る尺度等と併せた調査の実施についても検討したい。

6．まとめ

日本人女子学生87名を対象として、美しさに関わる32項目を用いた自己評価、および美～健康に対する関心、外見～内面に対する意識、美しさに対する自信について調査分析した結果、次のような傾向が認められた。

1）32項目に対する自己像の適合度は全体として低く、「美しい」「素敵な」「魅力的な」女性像とは明瞭な差異が存在する。

2）自己像の意味構造は、＜道徳性＞＜快活さ＞＜清潔感＞＜行動力＞＜歩き方・姿勢＞＜美意識＞＜肌のハリ・ツヤ＞＜プロポーション＞の８因子によって構成される。

3）健康よりも美に関心を持ち、内面よりも外見を意識する頻度が相対的に高い。

4）自分自身の美しさに対する自信の度合いは非常に低く、５点満点における平均値は1.012に留まる。

5）美―健康に対する関心と外見―内面に対する意識は相互に連関する（中程度の相関）。

6）美に対する関心は、＜清潔感＞に対する自己評価を低め、＜美意識＞に対する自己評価を上

げる作用を持つ。

7）外見に対する意識は、＜快活さ＞と＜清潔感＞に対する自己評価を低める方向に働く。

謝辞

本研究は、株式会社ワコール人間科学研究所と共同で行う女性美研究の一環として進められたものである。同所の岸本泰蔵氏、上家倫子氏よりお力添えを頂戴したことをここに記し、感謝申し上げる。

参考文献

伊藤由美，丹野義彦「対人不安についての素因ストレスモデルの検証－公的自己意識は対人不安の発生にどう関与するのか－」『パーソナリティ研究』第12巻第1号，pp. 32-33，2003.

内閣府『令和元年版 子供・若者白書（全体版）特集１日本の若者意識の現状～国際比較から見えてくるもの～』
https://www8.cao.go.jp/youth/whitepaper/r01honpen/pdf/b1_00toku1_01.pdf，2019年12月

山田雅子「女子短大生に見る現代女性の美人観」『埼玉女子短期大学研究紀要』第18号，pp. 213-226，2007.

山田雅子「外見の美しさと内面の美しさ－外見／内面の重視と美しさの捉え方の特徴－」『埼玉女子短期大学研究紀要』第30号，pp. 95-108，2014.

山田雅子「日本人若年女性が抱く美的価値観の因子構造－構成要素の重視度に対するアプローチ－」『埼玉女子短期大学研究紀要』第32号，pp. 61-75，2015.

山田雅子「自尊感情と現在の生活に対する満足度の連関－日本人女子短期大学生を対象とした一調査－」『埼玉女子短期大学研究紀要』第33号，pp. 53-70，2016.

山田雅子「女性美の基準に与える関心・意識の影響－美と健康／外見と内面に対する態度に着目した群間比較－」『日本社会心理学会第59回大会発表論文集』p. 118，2018.

山田雅子「日本人女性が抱く自己像の年齢変化－20代から60代の傾向比較－」『日本社会心理学会第60回大会発表論文集』p. 291，2019a.

山田雅子「日本人若年女性が抱く女性美の探索的調査（２）－女性美の構成要素－」『埼玉女子短期大学研究紀要』第39号，pp. 13-25，2019b.

山田雅子「美しい／素敵な／魅力的な女性像の比較－日本人若年女性はどのように表現を使い分けているのか－」 『日本心理学会第83回大会発表論文集』，印刷中，2019c.

山田雅子「美しい／素敵な／魅力的な女性像の比較－日本人若年女性はどのように表現を使い分けているのか－」 『埼玉女子短期大学研究紀要』 第40号，pp. 17-31，2019d.

山本ちか「大学生の全体的自己価値の検討」『名古屋文理大学紀要』第10号，pp. 15-22，2010.

Fenigstein，A.，Scheier，M. F.，& Buss，A. H. Public and private self-consciousness: Assessment and theory. Journal of Consulting and Clinical Psychology，vol. 43，pp. 522-527，1975.

i　本研究は既報（山田，2019c，2019d）と同一の調査に基づく。

ii　本研究では、自己評価と関心・意識・美しさに対する自信に焦点を絞り、調査内容の一部は分析対象としないこととした。